

左大臣

右大臣

石上麻呂 と 藤原不比等

# 平城京 に立つ

北鎌次郎 著

左大臣  
石上麻呂 と 藤原不比等  
右大臣

# 平城京 に立つ

北鎌次郎 著

物部氏「石上」~~~~左大臣・麻呂~~~~

女

~~~~

乙牟漏皇后

安倍古美奈

中臣氏「藤原」鎌足|右大臣・不比等~~~~馬合(馬養)

~~~~良嗣

~~~~平城天皇

高野新笠

~~~~嗟峨天皇

紀橡姫

~~~~

桓武天皇

越道伊羅都壳

~~~~光仁天皇

~~~~志貴皇子

天智天皇(中大兄皇子)

~~~~大友皇子

伊賀采女琢子娘

~~~~葛野王

十市皇女



## Ⅱ梗概Ⅱ

### 「乙巳」の変まで

蘇我の氏上の地位を稲目―馬子―蝦夷―入鹿へと継承すると共に、大臣位をも独占した。

馬子は、実妹【子姉君】の産んだ穴穗部皇子を殺して、同母弟の泊瀬部皇子〔崇峻〕を皇位に就けたが、五年の後、天皇を東漢直駒に命じて殺害させた挙句、暗殺実行者の駒の命を奪った。

蝦夷は、皇位継承を巡り、己の意に反し叔父境部麻理勢が厩戸皇子【聖徳太子】の子山背大兄王を推戴し譲らぬ為この叔父を殺した。

入鹿は、依然として人望の高い山背大兄王とその一族を理由もなく殺戮し、厩戸皇子の血脈を絶滅させ、祖父馬子の娘法提郎媛が生んだ、古人大兄皇子を次の皇位に就けるべく体制を固めた。

皇后宝皇女の同母弟で四十九歳の輕皇子は、自らの皇位繼承に意欲を示して居たが、蘇我氏の威勢に抗し得る後ろ楯が無く、等閑視されていた。

一衣帯水の大唐、百濟、新羅、高句麗の動向は、動乱の国を逃れ来る難民によりもたらされていた。長年に亘り皇室に多くの娘を嫁入させ、此処三代外戚としての地位を堅持して居る蘇我氏の血は、網目の如くにつながり、条件を具えた非蘇我の王臣を見出す事は容易ではなかった。

中大兄・大海人兄弟とて母方を四代遡ると蘇我稻目の娘堅塩媛に到達するのである。

皇位繼承の正統性から謂えば、皇后宝皇女【皇極・斉明】の第一子である中大兄皇子が最有力とされる筈だが、弱冠二十歳という若さのために、皇位との距離は未だ遠い存在であつた。蘇我氏から抹殺される危険などを、身に感ずる気配を全くみせず、自由奔放に振る舞っていた。

肥大化した蘇我本宗家に対しては、疎外された傍系の同族の中に不満が募つて居り、権力奪取を狙う勢力が盛衰しながらも常在していた。ここに極めて重要な事が行われた。

蝦夷の弟蘇我倉山田石川麻呂の娘、蘇我越智娘（持統の母）が、中大兄皇子に嫁入したのである。石川麻呂は、十七年前に殺された境部麻理勢と共に、山背大兄皇子を支持し蝦夷と対立した経緯が有り、二年前の山背大兄皇子とその一族殺戮に改めて怒りと恐怖を

抱いていた。さらに近頃、父蝦夷を凌ぐ権勢を頻りに振るい始め、長老の自分を事毎にながらぬにして止まぬ入鹿に怨恨の情を深めていた。

不比等の父鎌足と中大兄皇子他数人で蘇我打倒の機会を狙っていたが 皇極天皇四年乙巳【西暦六四五】飛鳥板蓋宮で蘇我入鹿が誘い出されて殺戮された。これを乙巳の変と言ひ【大化改新】とも言う。

石上麻呂はこのとき六歳であった。物部宗家の嫡子の子として武器を握らされて死を覚悟した。そして甘樫の丘の蘇我氏邸が火炎に包まれるのを見た記憶が鮮明にある。

藤原不比等はそれから十二年後、はるかに遅れて生まれて来たのだった。

## 「乙之の変の後」

～白村江の戦い～ 麻呂は参戦したが不比等は未だ三歳の赤子だった。

～壬申の乱～ 不比等は十四歳の少年であったが、一族の氏上の中臣連金が右大臣

であり、乱後に斬首され不比等の立場は微妙だった。

麻呂は大友皇子の死の最期を唯一人で看取り、御首を抱いて皇位篡奪を目論む大海人皇子の面前に立ったのである。国家存亡の危機の時代に、不比等は麻呂に十九歳遅れて生まれて来たという事は、生涯どうしても越える事の出来ない、二人の上下関係だった。

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。